

大学生の主観的幸福感とアイデンティティ形成の関係性

——「推し」がもたらす影響に着目して——

22003FRM 黒宮 真澄

キーワード：主観的幸福感, アイデンティティ, 推し

問題と目的

漠然とした不安を抱えながらも高い主観的幸福感を持つとされる大学生の主観的幸福感の主な規定要因は、自由な時間、人間関係、経済の豊かさである (ex. 佐々木, 2018)。一方では、主観的幸福感にはアイデンティティ感覚が影響しており、同時に心理的健康にも関連があるとされている (畑野, 2019)。ところで、近年ブームになっている「推し」や「推し活」は、大学生の主観的幸福感に関係しているのだろうか。先行研究の多くは、「推し」を持つことで心理的健康が高まると示唆している (ex. 今井他, 2010) が、その調査対象は「推し」がいる人のみであり、「推し」のいない人との比較やアイデンティティ感覚との関連から主観的幸福感を検討した研究はない。

本研究では大学生の主観的幸福感とアイデンティティ感覚との関連に、「推し」の存在や「推し活」タイプが影響を及ぼしているか否かを検討することを目的とする。また、「推し」に対する自己との関係性の認知や主観的幸福感とアイデンティティ感覚の関連を検討することで、若者の心性の理解を深め、心理的健康の維持や向上に関して新たな知見を得られるだろう。

研究1

1. 目的

質問紙調査を通して、大学生の主観的幸福感およびアイデンティティ感覚に、「推し」の存在や「推し活」のタイプが影響しているのか否かについて検討する。

2. 方法

1) 調査対象者と手続き 本研究に同意を得られた大学生・大学院生 152 名 (年齢 20.22 歳, $SD = 1.37$) を対象に、一斉に質問紙調査を実施した。

2) 質問紙の構成 ①フェイスシート, ②主観

的幸福感尺度 (伊藤他, 2003), ③アイデンティティ尺度 (下山, 1992), ④「推し」「推し活」「熱中していること」に関する項目, ⑤ファン心理尺度 (今井他, 2010 のファン心理尺度と小城, 2018 のファン尺度から陰性感情の質問を抜粋して融合) で構成された。

3. 結果と考察

主観的幸福感尺度, アイデンティティ尺度, ファン心理尺度の 3 つの変数について共分散構造分析を行った。しかし、十分なモデル適合を示さず、分析は分散分析と重回帰分析を採用した。

「推し」の有無と性別を独立変数、主観的幸福感を従属変数とする二要因分散分析の結果、すべての下位尺度において交互作用と「推し」の有無の主効果は見られなかった。性別の主効果は見られ、自信と満足感については男性の方が高く、達成感は女性の方が高かった。主観的幸福感に対する「推し」の存在や熱中する対象の特異性を検討するために「推しあり」「熱中あり」「両方なし」の 3 群を独立変数、主観的幸福感を従属変数とした一元配置分散分析を行った。結果、すべての下位尺度間で有意差は見られなかった。「推し」の有無とアイデンティティ感覚の高低群を独立変数、主観的幸福感を従属変数とした二要因分散分析の結果、「アイデンティティ基礎」下位尺度において満足感が、「アイデンティティ確立」下位尺度において失望感の低さが、ともに有意傾向となった。その他の下位尺度は「推し」がある者の中で差は見られなかった。一方でアイデンティティ感覚が高い人の方が低い人よりも主観的幸福感が高いことが明らかとなった。また、重回帰分析の結果、「推し活」タイプによる主観的幸福感への影響は見られなかった。

研究1では、先行研究と同様に、主観的幸福感

とアイデンティティ感覚には関連があることが明らかにされた。一方で、大学生の主観的幸福感及びアイデンティティ感覚に「推し」の有無や「推し活」のタイプは直接的に影響を及ぼしていなかった。要因として、本調査対象者の78%が「推し」を持ち、76%が女性という、偏ったサンプルの影響が考えられる。また、本研究の調査対象者は先行研究(ex, 長崎, 2023)と比較して、「推し」の有無にかかわらず主観的幸福感が高く、つまり、「推し」から得られるとされている主観的幸福感とは異なる、一般的に検討されている幸福感とは異なる、独自の主観的幸福感である可能性が考えられる。

研究2

1. 目的

面接調査で、「推し」と自己の関係性をどのように認知しているかを明らかにし、それらと主観的幸福感やアイデンティティ感覚との関連について新たな知見を得ることを目的とした。

2. 方法

1) 調査対象者と手続き 「推し」がいる大学生・大学院生11名(年齢20.22歳, $SD = 1.37$)に、「推し」「推し活」について半構造化面接を実施した。

2) 質問紙の構成 ①「推し」ができた経緯と出会えた時の気持ち, ②「推し」に求めているもの, ③「推し」から受け取っているもの, ④「推し」に提供したもの, ⑤「推し」は何であるか, ⑥「推し」を推す自分について、それぞれ尋ねた。

3. 結果と考察

KJ法により語りをカテゴリ分類した結果、「推し」は推す大学生の主観的幸福感を高めていることが見出された。「推し」を推す行為はプロジェクション・サイエンスの概念で説明ができる(鈴木, 2020)。主体である自分が構成した表象を「推し」にプロジェクション(投射)することで自分にとってポジティブで意味のある世界を受け取ることができることから「推し」を持つ人の幸福感を高めているという(久保, 2022)。本研究においても「推しに救われた」などの語りから「推し」とのプロジェクションに自分自身の意味づけをしていることが確認できた。また、「推し」と

の距離感や現実生活との区別が曖昧になる【推し必須群】と、現実の生活とバランスを取りながら「推し活」を楽しむ【バランス群】の2つが見出された。前者は〈「推し」のために働く〉〈推す資格〉などのカテゴリが出現し、「推し」と同一化したり関係が逆転したりしやすく、貢ぐために働くことを幸せや生きがいと語られていた。後者は〈生活の充実感〉〈「推し」と日常の分離〉などのカテゴリが見られ、現実とのバランスを取りながら「推し活」を楽しむ語りであった。これらの違いは、【推し必須群】は【バランス群】に比べメタ認知機能が弱く、現実の自分を現実社会の一人であるとして認知できていないためだと推察できる。メタ認知は、自己概念やアイデンティティと強い関連があり(上淵, 2007), 【推し必須群】は現実的なアイデンティティ感覚が適応的に発達していない可能性が考えられる。

以上のことから、「推し」がいる大学生の中には、「推し」と自己の関係が逆転し現実生活の質を下げってしまう【推し必須群】が存在するという事実と、大学生の主観的幸福感とアイデンティティ感覚の形成にはメタ認知機能が大きく影響を及ぼしているという2つの新たな知見を得ることができた。

総合考察

本研究では「推し」によって主観的幸福感が高まることが示唆された。しかし、その主観的幸福感とは尺度で測ることができる幸福感とは異なり、「推し」にプロジェクションしたときに特異的に生起する主観的幸福感の可能性が考えられる。

また、主観的幸福感とアイデンティティの形成にはメタ認知機能が大きく影響を及ぼしていた。メタ認知機能が弱いことで、現実の自分に関する認識や「推し」との適切な距離感が曖昧になり、「推し」との関係が逆転したり、現実の自分のアイデンティティ感覚の確立が脅かされたりする可能性が推測される。「推し」は現実の生活に彩りを与えてくれるもの、「推し」に翻弄されず自分のための「推し活」を楽しむ、そのために、身近な他者からの客観的な意見に耳を傾けることも必要だと考えられる。